ば、中学時代に小泉八雲の『怪談』を、四十代初めに司馬遼太郎の『坂の上の雲』を読んだことしか浮かばない。お粗末な限りである。その後も特に読書に身を入れるでもなく、馬齢を重ねた。

七十を越え、肩や腰にガタが来はじめた頃から、車の運転を控え、自転車での移動を心掛けるようになった。医院へも、碁会所へも、スーパーへも、すべて自転車で済ませた。

今から五年程前のことになるが、ふっと思い立ち、市立図書館へ立ち寄った。入るとすぐの目立つところに、「大活字コーナー」なる一角があった。年々視力が落ちてきて、字を読むことを避けていたのだが、直ちに一冊を手に取り、立ったまま、一気に読んだ。漱石の『坊っちゃん』であった。スイスイ読めた。目の醒める心地がした。これが転機となって、大活字本の熱烈なファンとなった。この書架は幅二間。高さ七段で、二千冊を超える大活字本が収まっていた。気に入った本から順次借出して、一年を過ぎる頃にはこの内の二百冊余を読み終えていた。

大活字本を「卒業」してからは、毎回「ジャンル」を決めて書架を巡り、本探しに熱中し、いつも十冊を借りた。発行される「貸出レシート」は整理のために、ノートに貼った。

机上には古い「広辞苑」を持出し、小まめに引いた。これは慣れてくると眼には少々辛いが、意外に楽しい「作業」でもあった。

図書館通いをはじめてから五年が過ぎた頃、読み終えた本の数を累計すると、「千冊」を超えていた。驚きであり、喜びであった。

その中には飛ばし読みなども少しはあるが、何はともあれ、「千冊超え」は大きな区切りであると同時に、次の千冊に向けての出発点でもあった。千という数字には、人の心を引き付ける不思議で、しかも特別な力が潜んでいるように思える。

外山滋比古は云っている。「本を読まないとバカになる。本を読みすぎてもバカになる。本はバカの薬」と。

私は晩年の五年間で、千冊の本を読んだ。だからといって「読書尚友」などと勿体ぶるものではない。もっと早くからまじめに読書に励んでいたらと、反省するものでもない。

ただ、この「千冊超え」によって得られた微かな自信が、これからの残りの人生を前向きに生きていく上で、少しは助けになるのではないかと、思っているだけなのである。

読書は私にとってピッタリの「薬」であったと思いたいし、これからもそうであろうと考えている。当分はボケている暇は無い。

《一般成人の部》優秀賞

あの人におすすめしたい本

塚田　盛久

本を読むのは大好きだ。

昭和8年（1933年）生まれの私は、「キンダー・ブック」・「講談社の絵本」・「幼年クラブ」・「少年クラブ」（戦争中は「若桜」・「海軍」）などで育ち、マンガも『のらくろ』や『冒険ダン吉』などだった。

戦争末期から終戦直後は紙不足で、教科書も新聞紙のような紙が配られ各自で切って製本する時期もあったが、世が落着くと、「リーダーズ・ダイジェスト」などから、世界の片隅が知れるようになり、岩波文庫の他に新潮や角川も文庫版を出し、内外の文学等を手軽に読めるようになった。

昭和30年頃、私の通っている教会の若い牧師（慶応大学・東京神学大学卒）が、礼拝説教・聖書研究の他に、若い仲間10数人で読書会をしてくれ、毎月選んでくれ、それぞれが買って読んだテキスト（文庫）を、解説してくれてから、皆で話し合う機会を設けてくださった。

その約20年が懐かしい。

それらの中には、他の人達にも是非薦めたい作品が幾つかあった。

その頃から本を買う場合、自分一人読めば済むものは友達や図書館で借りて読み、買った本を読んでいる最中に、自分が読み終わったら、あの人に薦めようと想う本も多くなったし、そうしてきた。

社会人になってからは、ライフワークの機械工学の実用書、内外の長編小説、趣味の山岳資料などを、年２００冊ぐらいは読んだ。

調べてみたら、定年退職後の平成8年（63歳）の玉石混交の３７０冊が最多で、内容は随分違う。（小説とエッセーが60、紀行文と短文学44、童話31、絵本59、写真と画集79、雑誌など97の合計３７０冊）。

最近は、日野原重明・柏木哲夫・鎌田實ら諸先生の、生命と生き方の本や、葉室麟の時代小説などを多く読んでいる。

それらの本の中でも、友達に薦められて、その頃まで関心の無かった部類の本に、新しい道が拓かれたのも、うれしい。

その数多くの作品中、他の人にお薦めしたい本は、平均で年約５％であった。

毎年、クリスマスには、家内のきょうだい４所帯と、仲人を頼まれた６所帯に本を選んで贈ってきた。今迄に、「星野富弘の詩画集」や「金子みすゞの童謡集」等があったが、今年も選ぶ時期が来た。

本を読むのは楽しい。そして共に読むのはもっと、もっと楽しい。

＊＊＊ 審査講評 ＊＊＊

〝自分が伝えたいこと〟は？

国府正昭

今年度は新型コロナウイルスの感染拡大の中で、読書エッセイコンクールの応募数がどう変化するのか気になっていましたが、例年同様百編を超える応募があり、いろいろと制限の多いこの状況下でも読書に親しんでおられる方々が多くいらっしゃることを知って、大変うれしく思いました。

中山先生と合議の上十二編を入選と決めました。選考の基準は種々ありますが、原稿用紙三枚という字数の中で自分はこれを伝えたいというものをしっかりと持っている作品は、読んでいても手応えがあり強い印象を受けるように思います。ですから、書き始める前にまずじっくりと考えをまとめることが必要なのかもしれません。入賞を逃した方は落胆しておられるかもしれませんが、コンクールである以上、どうしてもより光っている作を選ぶことになります。選外となった作品にも、もちろんそれぞれの思いは感じ取れます。不必要な失望をなさらず、より良いものを目指してください。

一般成人の部は今年もしっかり書かれた佳品が多く激戦でした。最優秀賞の的場大地さん、優秀賞の松本康さん、高波功さん、塚田盛久さん、いずれも明確な主張のある文章で甲乙つけがたい出来栄えだったと思います。今回の応募者の最高齢は九十歳でしたが、年配の方々が読書を楽しみながら、このコンクールに応募してくださる姿には頭の下がる思いがします。また今年は二十歳代から四十歳代の若い層からの応募が目立った気がして、とてもうれしいことでした。選外となりましたが、森江リサさん、池畑佳美さん、上田利栄子さん、服部ももこさん、横山美菜さん、大野愛華さん、山崎朋子さん、堀田ちひろさんなど来年度の再挑戦を期待しています。

中学生の部では林亜依美さんの作を最優秀賞としたが、「本の扉」という言葉を見つけ出すことで、ただの感想文で終わらせなかったところがとても素晴らしいと思いました。青木千織さん、佐藤陽さん、後藤恋奈さんの作も体験と結びつけるなど、それぞれに工夫を感じたので優秀賞としました。

小学生の部では、髙嶋梅葉さんの作が読んだ本と夏休みの経験を上手に結びつけて実にしっかりと書かれていたので、最優秀賞としました。また、木村元揮さんの作も「ぼくが歴史をすめるわけ」がユーモラスかつ論旨明快に語られていて、横山智さんの素直な作、佐野太玖真さんの今日的な着眼の作と共に優秀賞としました。

中学生の部と小学生の部に共通して感じたことですが、「この本を読んだきっかけ」から書き始め、「一番印象に残ったこと」を書き、「次に」という具合に書き次いでいくパターン化した作が多くありました。学校等で取りまとめて応募してくださるのはありがたいことですが、教室での指導の際に、子どもへの助言として例示されるのかもしれません。しかし実際に書くときには、その〝たとえば〟を越えて、〝自分が本当に伝えたいこと〟をしっかりと見極めてから書き出すことが大切です。そこを心がけてほしいと思いました。

読書がくれた楽しみ

中山　みどり

「今年はコロナウイルスで、旅行やお出かけに行けなかった人はたくさんいると思います。」と書いていた小学生の部最優秀の髙嶋梅葉さんは主人公たちと夏休みを楽しめたそうです。文章力も確かで、すがすがしさを感じました。

歴史が好きな木村元揮さんは戦国時代の魅力的な武将に出会い、「まさにその時を見たような、一緒に人生を生きたような気になれた」と、すごいですね。

一年生の横山智さんは夢のようなカラスのパン屋のお話で、バローにもないというところに思わず笑ってしまいました。

佐野太玖真さんは屋久島についての読書を通して、地球温暖化の問題にも発展していました。私も学ぶところが多かったです。

中学校最優秀賞は林亜依美さんの作品でした。「本の扉」を開けると、あなたは海を見ることもでき、優しい気持ちになるとのこと、素晴らしい読書世界を持っていますね。

青木千織さんは『手紙屋』という本を通して、自分の生活を考えるという姿勢に好感を持ちました。中学生らしいさわやかさが心をうちました。

佐藤陽さんの作品も感動的でした。本を送ってくれる祖母は、本ばかりでなく、大切なものを贈ってくれていたのです。いつか父になる日、自分もそうしようとの思いに涙が出ました。

後藤恋奈さんも揺れ動く思春期の自分と著者とを重ね合わせていました。初めて読んだ時には理解できなかったことが、しだいにわかるようになっていくのは、私も経験しましたよ。

瀬津有梨さんや鶴田紘人さん、佐藤奏心さんも入賞に近かったことを記しておきます。

成人の部最優秀賞になった的場大地さんは二十代の若い人でした。『鼻』を通して、家族の鼻を語っているところが、ユニークでした。今後の発展が楽しみです。

松本康さんの勉強家ぶりには驚かされました。私と同世代ながら、幅広い社会への視線に学ぶべきものを感じました。

高波功さんの多読多得もすごいですね。晩年の五年間で千冊の本を読んだということです。この千冊超えが残りの人生を前向きに生きる力になっているようです。

塚田盛久さんも再会の人ですが、継続して書き続けておられることにうれしくなりました。優秀賞の三人は年を重ねられて円熟のエッセイでした。

廣瀬安司さんも書き続けておられるようで、喜ばしく思いましたし、入賞以外にも惜しまれる作品が多くありました。上田利栄子さん、谷口訓子さん、服部ももこさんの方々です。

思いがけないコロナの一年でしたが、冒頭の髙嶋さんのことばのように、読書は困難を乗り越えて行く大きな力になると確信しています。

読書に関するエッセー
入賞作品集　二〇二〇

令和二年十二月発行
発行　四日市市教育委員会
編集　四日市市立図書館